

中村素堂

慶大教授で、宮内省ご用掛などしていた漢学者の国府犀東先生とは、お役所で二十年もご一緒だったので、随分面倒な字を教えていただいたりしたが、ある時宮廷のご用指物師に頼んで、旅行用として大小二十八顆の木印材を作り、これがチャンと一箱の中に組み入れられるようにし、関野香雲とか新聞静那とか松浦羊言とか当時の若手の先生方に願って刻してもらい、これを帙に入れて大自慢で役所へ持参、犀東先生のご覧にいとると、

二十九辰来隕牀。

化成印顆在中箱。

突然生采互聯璧。

福寿茲開無尺藏。

と即座に筆を把て七絶一首を記し、『丁卯（昭和二年）八月旬一福寿印題賛犀東居士』と款を入れて下さった。

詩の大意は判つても、なぜこれを福寿印といわれたのか、結句にも福寿茲に開く無尺藏とある。あるいは二十八宿のようなものと関わりのある言葉なのかと思ったりして、何か調べたりしたが、何ぞはからん福寿の二字で画数が二十八画なのであった。

何とも古風な文人的な遊びなのである。しかし、こんな遊びがすっかり忘れられてきたのも、何とかして漢字を使わない算段をしている時世のせいかもしれないと考えていると、今の青年、少年諸君も文字にかかわって全く遊ばないのでもないことを発見した。

私は東京の西武鉄道の沿線に住んでいる。池袋から出て練馬、富士見台などを通って入った所である。

この私鉄の駅名札にセロテープで紙を貼り、「いけぶくろ」のけの字を消してみたり、「ふじみだい」のじの字を消したりしている。いつの時代でも、こんなことはやるのかなと思うが、公益性のものを遊びに使うことなんかと考え合わせ、何となくチャチになったような気もする。

冒頭に申し述べた通り、こんなくだらぬ話をし、またこんなこと

いうのを見ると、われながらもうそろそろ——だろうと苦笑を禁じ得ないものがある。以上、明治百年ばなし付録。

〔書道〕昭和四十三年十月



〔随分〕（昭和五十一年）